広島大学教育学部紀要　第二部　第45号　1996

Table by the Window における「人間探求のドラマ」の深化

中　村　愛　人

（1996年9月9日受理）

T. Rattigan's Deeper Understanding of Humans and Human Relations in *Table by the Window*

Yoshito Nakamura

Separate Tables (1954) by T. Rattigan consists of two one-act plays, *Table by the Window* and *Table Number Seven*. Both plays are set in the same seedy but comfortable hotel with almost the same characters. The first play that we discuss here chiefly concerns a fashion model and her stormy relationship with her ex-husband. They hurt each other in their married life, but they still need each other after divorce.

The aim of this essay is to examine how effectively they are presented, and also examine the theme and dramatic technique of the play.A comparison is made at times between this play and *The Deep Blue Sea*.

Ⅰ．はじめに

Terence Rattigan (1911-1977) が，彼の最高傑作であり代表作であると評される *The Deep Blue Sea* (1952)[1]の2年後に発表した *Separate Tables* (1954)[2]は，これまた好評をもって迎えられ，興業的にも大成功を収めた。「円熟味の点では最高の傑作」[3]との評価もあり，人間を人と人との関わりにおいて掘り下げ，それを，巧みに抑制した表現と見事な劇的手法によって描きあげ，観客を魅了した，まさにラティガンの面目躍如と言った作品ということができよう。

作家が最高傑作と評される作品の後に書いたものというのは，その作品と一体どのような関連をもつのだろうか。頂点に上り詰めた作家にとって，結局，あまり代わり映えのしない同じような趣向の作品になってしまうのだろうか。それとも，作家というものは，常に新しい何かの期待がなければ作品を書かないのであろうか。また，結果として作品に新しい何かが込められなければ発表をためらうということも当然考えられるであろう。

この作品は，double bill として *Table by the Window* と *Table Number Seven* と題された二つの一幕劇を組み合わせたもので，場面や登場人物等共通点は多いが，内容的には大きく違っていて，独立した別々の劇と考えてよいであろう。[4]

本論では，上記のような観点から，*Table by the Window* を対象として，作品の主要人物とその関わりを，テーマと劇的手法との関連で論じ，可能であるなら *The Deep Blue Sea* との比較において，作品の新しい芽を探ってみたい。

Ⅱ．

作品は，とある小ぎれいではあるが決して高級とは言いがたい特定ホテルを舞台として，冬のある日の夕食時から翌日の朝食時までを，その食堂とラウンジにおいて，外の激しい風雨を背景にして，主人公のジョン（John Malcom）の激情さながらに，急速に，起伏をなして展開する。

第一場は，食堂で，永住者達（permanent residents）や短期滞在客（transients）が，いつものように各自の定席で夕食をとっている場面で始まる。ここでの人物たちは，とりあえずは空いている二つの席の所有者を除いて，幾つかのグループ分けができそうである。前者の，レールトン=ベル（Mrs Railton - Bell），ミーチャム（Miss Meacham），マシスン（Lady

Matheson），ファウラー（Mr Fowler）等，いずれも人生の旅路の果てに行き着こうとしている老齢者たち。そして後者のチャールズ・ストラトン（Charles Stratton）とジーン・タナー（Jean Tanner）の二人の若い大学生カップル。ホテルの従業員のウェートレス，中年のメーブル（Mabel）と若いドリーン（Doreen）。それぞれが，各自存在感をもち，グループとしては，いずれも鮮明な対照をなしている。

劇が動き，先ず，空席だった一つに，新来者のアン（Mrs Shankland）が，遅れて到着する。彼女のセンスのよい服装や雰囲気は，このようなホテルには似合わない。次に，ホテルの女支配人であるクーパー（Miss Cooper）が入って来て，新来のアンに心遣いを示す。最後に，窓際のもう一つの空席の持ち主，常連の長期滞在客であるジョン（John Malcolm）が，いつもの酒場から戻って来てアンと予期せぬ出会いをする。

第二場は，夕食後のラウンジ，前場から2時間後。本を読んで勉強をするチャールズとジーンの二人しかいない。他の滞在客のこと，アンのこと，二人の結婚観について等，二人の会話がしばらく続く。レールトン=ベルとマシスンの二人が入って来て二人は出て行く。残った二人と再び酒場から戻って来たジョンとの議論。二人が去り，ジョンと彼に好意を寄せるクーパーとの親密な一時は，アンの登場で遮られる。ジョンとアンというかつての夫婦の二度目の話し合い。初めは，アンの彼と縒りを戻そうとの計画は実現しそうな所まで首尾よく行っていたのだが，クーパーの告げ口によって失敗に帰す。風雨の中外に飛び出したジョンと残されたアンを自室に誘うクーパー。

第三場は，翌日の朝の食堂。朝食後だが，再びジョンの席とアンの席が空いている。やっと帰って来たジョンに，クーパーは，昨夜話し合ったアンの事を説明し，アンが彼を必要としていること，彼女の虚栄心や自己中心的なところはたいていの人間がもっている欠点であること，彼女が睡眠薬に頼っていることなどを話して聞かせる。彼女の計らいによるジョンとアンの三度目の最後の話し合い，そして和解。

三場の展開は以上のようであるが，主人公のジョンの内面さながらに，激しさと起伏の大きさが特徴的と言える。そして，それぞれの場面が，非常にうまく組み合わせられて進行し，効果を上げている。

第一場の夕食時の老齢客たちの話は，ホテルの食事のこと，競馬のこと，他の客のうわさや昔のこと等，この人達自身のことを教えてくれるだけでなく，ホテルの雰囲気を伝え，老いにまつわる孤独というテーマまでも見事に提示するものとなっている。この老齢客のグループに対するに彼らから“Bohemians”[5]と称される若い大学生のカップルがいる。二人は，到着当初のアンと同様，何故このホテルに滞在することになったのかいささか理解に苦しむが，夕食にスラックス姿でご婦人方の顰蹙を買ったり，その結婚観に見られるように，因習等に捕らわれないで，自分たちなりの自由な生き方をしようとしている。この両者の対比は，視野を広げて考えるなら，まだ世間知らずではあるが希望に満ちた若い世代と彼らも何十年後かには辿り着くであろう人生の終幕を迎えようとしている保守的な年寄りの世代の対比ということができるであろう。そして，作品において特に重要な四十代前半と考えられるジョン，アン，クーパーの三人の人物は，この両者の中間に位置する存在となっている。つまり，この三人にとって，言わば人生の出発点と終着点が示されているという構図が成り立つ。例えばジョンと結婚した当時のアンは，今のジーンと同じように，子供を作らないと言い張っていたし，今のアンは，年を取ること，それに伴う孤独（loneliness）を極度に恐れている。

ANNE. Yet I hate being alone. Oh God, how I hate it. This place, for instance, gives me the creeps.... What a life. I can see myself in a few years' time at one of those separate tables.... (135)

この二人は，第二場の初めのラウンジの場面において，他の客たちのことを，ものに捕らわれない若者の視点から語ってくれる。彼らは年とっていてみんな惨めな人達だろうというチャールズに対して，ジーンは，それどころか，彼らはそれぞれの楽しみをもつ幸せな人達であると主張して譲らない。しかし，皮肉なことに，このジーンの主張を通して伝わってくるのは，いかにも惨めな存在である彼らの現実であろう。ところが，そのジーンでさえ，このホテルで唯一の本当に惨めな人物はアンであると認める。このように，ヒロインのアンにいつの間にか照明が当たるように，作品は巧妙に仕組まれている。チャールズとジーンの二人は，登場人物の中で，人生の出発点を示し，他の人物たちを映し出す鏡となり，更に照明係にもなっている。

第三場は，翌朝のいつもと変わらない食堂の場面を迎える。前日の夕食時と同じように，二つの席が空いている。この第一場と第三場を同じ始まりにしたのも，激動の第二場の後だからこそ，その成り行きを見守らせる意味で非常にうまくできている。

次に，劇的手法として見逃せない伏線について検討する。[6]アンは，二番目の夫と離婚した後，自分がいつまでも若く魅力的ではいられないという現実を前にして，一人でいることに耐えられず，ジョンの知り合いから聞き出して，縒りを戻そうと彼のいるホテルに偶

然を装ってやってくる。ジョンと縒りを戻そうというのは，彼女も "...you are the only person in the world I've ever been fond of. (132 - 133)" とジョンに向かって言うように，そういう事態においては，少しも不自然ではないし，まして責められるようなことでもない。しかし，彼女は，自尊心（pride）のために，自分から会いに来たということを隠して，それを偶然に見せかけようとする。

先ず，服装や物腰から一見して分かる，このホテルに場違いなアンの雰囲気がある。ジョンでさえ，何故もっと一流のホテルに行かなかったのかと問うている。また，アンが，ホテルの食堂で，夕食に遅れて戻って来たジョンに再会する場面であるが，アンはジョンが気が付く前に彼を見ている。どちらが先に気付いてもいいように思われるかも知れないが，やはりアンはそのつもりで彼を待ち受けているのだから，先でないとそのことが伝わらないだろう。更に第二場で，アンは，一人でいるのは耐えられない，このホテルで年とって孤独に暮らす人達を見るとゾットするとジョンに訴える。彼は，勘ぐることもなく，それなら何故ここに来たのかと問う。"For the briefest instant she looks startled, but recovers at once. (135)" 彼女は，迂闊にも一瞬はっとするが，すぐに取り繕って，二人の再会はすばらしい偶然で無駄にしてはいけないと強調するあたりさすがと言わざるを得ない。このように，巧みに隠そうとしているが，そこここにちりばめられた綻びが，一旦彼女の計画が露見したときの説得力を増し，ジョンの激怒を高める働きをする。

もう一か所，アンの二度の結婚を比較しての，興味深い二人のやり取りがある。

JOHN. Girls, which husband would you choose? One who loves you too little - or one who loves you too much? .... Third time lucky perhaps.

ANNE. Perhaps. (113)

何も知らないまま，この次はうまく行くだろうと，彼女に対する思いやりともとれるジョンの言葉を，密かにそれを彼に対して目論んでいるアンは，一体どのような気持ちで聞いたであろうか。また別の見方をすれば，これは，二人が結末で和解し縒りを戻す伏線ととれなくもない。

ジョンとクーパーの親密な間柄は，後の二人きりの場面で自ずと明らかになるのだが，第一場で，初めて彼女が食堂に入って来て，支配人として客に次々に笑顔で話しかける段階では分からない。しかし，窓際の席が空いているのを見てたちまち彼女の微笑が消え，ウェートレスのメーブルにジョンの夕食の事で思いやりのある指示を出す彼女の態度に注意しておれば，後の場面での二人を矢張りと納得できるであろう。

ここまで伏線の効果的な使用の例を幾つか検討した。次に，人物の会話を取り上げたい。劇において，二人でなされる会話つまり対話が重要なのは言うまでもないが，特にこの作品においては，人物が二人きりになったときの対話が，非常に効果的に使われている。主要な三人の人物のうち二人の組み合わせが先ず注目される。ジョンとアンの間では，第一場で一度，第二場で二度，第三場で一度，合計四度の対話がなされるが，それぞれが，二人の過去と結婚における問題点，そして相手に対して抱いている気持ちに至るまでを少しずつ明らかにしてくれる。途中，ドリーンが給仕に来り，二人の関係が他に悟られるのではないかと緊張感が高まる場面となっている。ジョンとクーパーとの間でも，二人の親密さを示し，ジョンの過去を掘り起こし，一度は，ジョンとアンとの関係を，クーパーの嫉妬心からの告げ口によって崩しかけるが，最後には，もう一度二人の仲を執り成すに至る，作品にとって実に重要な対話がなされている。そして三人のうちの最後の組み合わせであるアンとクーパーの場合は，残念ながらホテルの支配人とその客との事務的な会話しか見られない。しかし，ここで見落とせないのは，第二場の最後にほのめかされている，クーパーの自室での二人の対話であろう。作品の一番大きな展開をもたらす契機が，この表されない対話と言えようか。クーパーは，これによって，アンの性格と彼女の置かれた状況を的確に判断し，自分は身を引いても二人の仲を執り成そうと考えを決めた。表されないが故に，それだけ重い意味を持たされた対話と言えよう。チャールズとジーンも二人きりになったとき，年寄り連中の目に悩まされることもなく，彼ら自身について，他の客たちについて，そしてアンについて，思い切った意見を披瀝して，作品の世界に別のアングルからの見方を提供してくれる。このように見てくると，例に挙げた対話だけでなく，それ以外の人物によるものも含めて，実に見事に対話が使われて，効果を上げていることが分かる。

劇的手法について，最後に，ジョンとアンの再会の場面を見ることにする。

JOHN. (At length.) Is this coincidence?

ANNE. Of course. (112)

思いもしなかったアンの突然の出現に，考えのまとまらないまま，ジョンは，このホテルに来たのは偶然なのかと尋ねている。当然それ以外に無いと答えるアンだが，彼女は，既に何度も言及したように，実は，わざわざジョンに会いに来たのだった。彼女は，後の場面でも，二人の再会の偶然を強調して言う。

ANNE. ...it's such a wonderful fluke our meeting

again like this, that we really shouldn't waste it. We must see some more of each other now. After all when fate plays as astounding a trick as this on us, it must mean something, mustn't it? (135)

しかし，彼女がどれ程偶然を主張しようとも，彼女自身が仕組んだという事実は変えられない。そして，彼女には，その事実を知ったジョンからの厳しいしっぺ返しが待っている。すんでの所でうまく行きかけた計画もたちまち台無しになってしまい，彼女は，ジョンを諦めて，このホテルを出ようと覚悟する。このことは，作品として一体何を意味しているのだろうか。偶然性を最大限に利用して作品にセンセーショナルな効果を上げるものとしては，メロドラマ（melodrama）がある。メロドラマ的（melodramatic）というのは，そのような作品の特徴をさして言うものである。[7]ここでのアンにおける偶然性の否定は，作品としては，メロドラマ的なものの否定につながるものではないだろうか。作品は，その展開における契機としての偶然性を排除し，しっかりと地に足のついた，写実性を主張していると言い換えられよう。人生の真実を追究する作品としては，当然の帰結と言える。

ジョンとアンは，一度結婚に失敗している。それでも，二人は，お互いを必要としている。ジョンのほうは，最初に結婚した時から変わらず彼女を愛していると言う。

JOHN. I have still only one type in the whole world, Anne. God knows it does little for my pride to have to admit to you, but I never was very good at lying about myself. (*Looking at her again.*) Only one type. The prototype. (134)

ジョンは，アンには彼の要求を満たすことはできないと分かっているが，それでもアンを愛し続けると断言する。確かに愛というものは，見返りを求めないとは言うものの，その前に，頭が良くて理論家のジョンにして何故アンを愛するようになったのだろうか。ジョンの言葉からは，アンの美貌の他は欠点ばかりが言われているようで，作品としては，その点の説明が欠けるように思われる。女性の美貌は，それほど価値があるというのだろうか。逆にアンの口からは，ジョンの良い面が次々に述べられていて，彼女が彼を必要だというのも頷けるようになっている。

さて，ここで主人公二人の現実認識，現実を直視し，現実に直面することができているかどうかという問題に移ることにする。これは，作家の他の作品にも共通の主要なテーマであり，[8]この作品においても，孤独と共に見落とすことのできない要素となっている。

アンは，何故ジョンに会って縒りを戻そうとしたのだろうか。彼女は二度目の夫と離婚し，再び一人になった時，老いの程遠くないことを知る。老いれば，勿論，女性の美貌に引かれて集まる男達はいなくなるだろう。彼女の場合，親しい友達も少ないと言っているから，当然の成り行きとして，孤独に襲われることになる。彼女は言う。

ANNE. You can be more alone in London than in this place, John. Here at least you can talk from table to table. In London it's the phone and usually no answer.

. . . . . .

I never have been able to face anything alone - the blitzes in the war, being ill, having operation, all that. And now I can't even face - just getting old. (150 - 151)

これは実に的確な現実認識ではないだろうか。自分自身に関して，これ程正確に理解でき，しかもそれを素直に認めることのできる彼女は，ジョンは否定するが，確かに八年間で成長したと考えられる。それが分かったからこそ，ジョンも，

JOHN. ...our two needs for each other are like two chemicals that are harmless by themselves, but when brought together in a test-tube can make an explosive as deadly as dynamite. (150)

などと救いようの無いことを言い，更に，

JOHN. (*Gently.*) You realize, don't you, that we haven't much hope together? (151)

とまで駄目押しをしようとするが，アンに "Have we all that much apart? (150)" と言い返されるに至って，もう一度彼女と共に二人で生きることを決心できたのではないだろうか。

ジョンの場合は，どうであろうか。頭が良くて，弁舌に長け，理論家肌の彼なら，そのようなことも当然可能であるはずだが，弱みは，現在このホテルでは自分の過去を隠していること，現実から逃避していると言われても仕方のない暮らしをしていることである。それが明らかにされるのは，クーパーからその事実を突き付けられた時であろう。彼女は，アンについての自分なりの解釈を，ジョンに話す。

MISS COOPER. ... there's not all that much to choose between you, I'd say. When you're together you slash each other to pieces, and when you're apart you slash yourselves to pieces. (145)

このように，ジョンとアンの二人の関係について，二人の意見と全く一致する冷静で的確な判断を示した後，

アンが多量の睡眠薬に頼っていること，アンの虚栄心とか自己中心的なところとか嘘をつくとかの性格上の欠点は，人間誰しも持っているもので，特別なものではないことを説明する。それでも今の生活から抜け出す踏ん切りのつかないジョンは，

JOHN. Don't interfere in this. Just let her go back to London and her own life, and leave me to live the rest of mine in peace. (147)

と決めつけようとするが，クーパーの方が，一枚上手である。

MISS COOPER. .... Be honest, now. Oh, I know there's your work and your pals at the Feathers and - well - me - but is it even living? (147)

ここで今までのような暮らしを続けたとして，それが本当に生活していると言えるのかと，ジョンの言い逃れを許そうとしない。つまりクーパーは，ジョンに現実に直面し，現実に生きることを求めたのだ。ジョンが，結局，希望は持てないと言いつつも，最後になって，アンとの生活を選ぶ決心ができたのは，このクーパーの説得の力が与かって大であったと考えられる。

三人の最後として，クーパーについては，なかなか判断の難しい人物である。彼女自身は，非常に冷静で判断力もしっかりしている。彼女は，ホテルの客の世話ばかりをして，どうも自分のことは後回しになってしまうらしい。なまじその人たちの現実が見えてしまうために，自分のことはそっちのけで相手のことを優先してしまう人物と言えるだろう。ジョンと自分との関係が，男女の愛情で結ばれたものでないことも，はっきり認識しているし，アンについても，あまりにも彼女の状況が分かり過ぎるために自分から身を引いてしまう。その決心のついたすぐ後で，ミーチャムに，あなたは稀な「一人でいるタイプ（an 'alone' type）」(142) であり，一人でちゃんとやって行ける人だと言われた時，彼女は一体どんな気持ちでそれを聞いたであろうか。どう見ても損な役回りの人物としか言いようがない。

クーパーは，初めてホテルにやって来たアンを気遣って，他の客たちに引き合わそうとする。

MISS COOPER. ... I hate any of my guests to feel lonely. (*Conversationally.*) Loneliness is a terrible thing, don't you agree?

ANNE. Yes, I do agree. A terrible thing. (115 - 116)

わたしたちは，孤独についての二人の実感の重みを伴ったやり取りに，*The Deep Blue Sea* に描かれていた "fellow - feeling" を再び見ることができる。[9]恐らく二人の間には，暗黙のうちに "friend" と呼び得るような関係が，成立したのであろう。それだからこそ，クーパーもアンの為にそしてジョンの為にも身を引く決心がついたのではないだろうか。

ジョンもアンも，最後には，現実を認め，失敗するとお互いに分かっていながら，新しい生活に飛び込んで行く。殊にアンの場合，自分の現実に気づいたからこそ，偽ってまで，ジョンに近づき縒りを戻そうとした。現実を認識するだけでなく，更にその先まで行動に移している。しかし，その結果は分からない。

Ⅲ. おわりに

Table by the Window は，さすがに円熟味のある傑作と評価されるだけの作品らしく，劇的手法において，人間と，人と人との関わりにおけるテーマの掘り下げにおいて，完成度の高い作品であった。最高傑作と言われる *The Deep Blue Sea* と比較してみると，メロドラマ的な偶然性という要素を，作品の展開によって否定し，現実感と写実性を重んじた作品としての方向づけがなされ，それぞれの人物が，各自存在感を持ちながらも，グループとして，互いに対照によって引き立て合う働きをなし，主人公の男女が，現実を認識するだけでなく，その現実に飛び込んで行くという行動力を見せていること等，一歩進んだ，あるいは一歩進もうとした作品作りがなされている。初めに問題として提起したように，作家というものは，常に前進をするという意欲と宿命を背負って創作を続ける存在だと言うことができよう。

注

(1) Michael Darlow & Gillian Hodson, *Terence Rattigan: The Man and His Work* (Quartet Books, London, 1979),p.201.
"The Deep Blue Sea is undoubtedly Rattigan's finest full - length serious play...."

(2) *Separate Tables* という表題は，「銘々のテーブル」「別々の食卓」の意味で，ホテルの滞在客それぞれの孤独（loneliness）を象徴するものとなっているが，後者にすると，印象として，テーマが些か家庭内に絞られ過ぎるかもしれない。

(3) 小田島雄志 「イギリス現代劇 1」『講座英米文学史 7　劇Ⅲ』 大衆館書店，1992，p .140.

(4) T. C. Worsley, "Terence Rattigan and his critics", *London Magazine*, vol.4, 1964, p.65. Rattigan's next play was *Separate Tables*, and the ingenious idea behind it was to write two entirely different plays set in a common

background, the background of a small South Coast private hotel with its genteel residents, against whose genteel middle class values his two misfits would show up all the more clearly.

(5) Terence Rattigan, *The Collected Plays of Terence Rattigan*, vol.3 (Hamish Hamilton, London, 1964), p.110.
以後，作品からの引用は，すべてこの版を使用。引用文の後に頁数のみを記す。

(6) T.C.Worsley, p.65.
'Preparation' is the most important and elementary skill that a dramatic writer must master. It means so laying out a scene or a succession of scenes that the emotional weight, whether comic or dramatic, comes at exactly the right - the intended - moment.

(7) M.H.Abrams, *A Glossary of Literary Terms*, 4th ed. (Holt, Rinehart and Winston,1981), p.100 - 101.
MELODRAMA: .... The protagonists are flat types; the hero and heroine are pure as the driven snow and the villain is a monster of malignity (the good guys and bad guys of the movie western and many television dramas are modern derivatives of character types in the older melodramas). The plot revolves around malevolent intrigue and violent action,while credibility both of character and plot is sacrificed for violent effect and emotional opportunism. ... The adjective "melodramatic" is applied to any literary work or episode that relies on improbable events and sensational action.

(8) 拙論「*The Browning Version* に見る教師の転換点」『広島大学教育学部紀要　第２部』第40号 1991
「*The Deep Blue Sea* における愛をめぐる人間探求のドラマ」『広島大学教育学部紀要　第２部』第44号 1995等を参照。

(9) 拙論「*The Deep Blue Sea* における愛をめぐる人間探求のドラマ」『広島大学教育学部紀要　第２部』第44号 1995 p .36